

9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100



墨てしなく純  
くジャングルの  
暗緑色の平面  
を、ボルネオは  
サラワク州の主  
河ラジャン川  
は、まるで地理

の教科書の見本のように蛇行している。  
マレーシア航空のターボプロップ双発機  
に乗っていると、高

度が低いので、ボル  
ネオの風光は手にと  
るようにわかるのだ  
が、私は機内でいざ  
ざか憂鬱であった。

この広大な自然は、

たしかに素晴らしい。だが、それにし  
ても、この地は一体、どこの国なのか。

もとより、サラワク州もサバ州も、行

政的には今日、マレーシア連邦に属する

のだが、私がボルネオ、つまり東マレー

シアにおいてマレー人を見出すことは、

むしろ稀だといつていいほどであり、原

住民の大部分を占める海ダヤ族(イバン

# ボルネオ考

中 嶋

嶺 雄

族)、陸ダヤ族以外は、すべて中国人で  
ある。それも、クチン(サラワク州)、

コタキナバル(サバ州)、サンダカン

(同)といった都市になると、その住民

は圧倒的に中国人が多い。ボルネオもか

なり奥地に入ったラジャン川のほとりの

シヤミリの街も中国人ばかりである。

その日の朝、車をチャーターして陸ダ

ヤ族がその特徴的な高床長屋(竹製の「

国文化」の強烈な自己主張に、私は圧倒  
された。

このようにボルネオの大地をもうま

で根深く中国人が「汚染していること

に、いまさらながら驚き、一体、この地

はこの国のものなのか、マレーシアと

はなにかを考え、いざざか憂鬱になつて

いたのである。

私の今回のボルネオ行きは、海外學術

調査の一環として

「中国の影」の広が

りや華僑対現地人の

関係などを調査する

ためのものであった

が、ここに私がこの

目で見出した現実を

とりあげただけでも、中国とアジア諸國

との近くて遠い、複雑で困難な関係を裏

感することが出来る。私たちは、このよ

うなローカルなレベルでの地域的現実を

ほとんど無視してアジアや中国をあまり

にも恣意的に論じすぎているのではなか

らうか。

おいてさえ排他的に保存されている「中

(東京外語大助教授)